



昭和21年6月

135

創刊昭和5年

山岳界再建特輯

山へ歸らう

(日本山岳會の復興と再生)

小島 鳥水

私共は、今廢墟の中に立つてゐる。何處を見ても、黄な臭く煙ッぽい。この頃の、新緑燃ふるが如き朗らかな朝ですらも、黄昏の色が低迷してゐる。地面は、焦土といふ單色な絨氈で覆はれてしまつた。その間を右往左往する人々の間に、整然たる合唱がなくて、三々五々、無秩序にブツ／＼咳やく獨語があるばかりだ。

日本山岳會の事務室も、瓦礫と灰になつた。事務所ぐらゐ、さ言ふ勿れ。そこには、山岳會成長の歴史があり、仕事の上に必要な記録があり、恐らく日本一と稱して、もてなからうほどの、山岳圖書が、集積せられて、中には又と獲難い稀書珍籍もあつた筈だ。それが、凡べて炎上した。物は心に繋がる以上、物と心とは、そんなに截然と切り離せるわけにはゆかない。無いもの盡くしては、手も足

も出ない。それよりも、尙ほ悪いことは、全會員の殆ど半數なる六七百人が罹災して、その内には戦歿者、戦災死者、病死者もあらうし、幹部といつたやうな人たちの間にも、飯塚篤之助君夫妻の東京寓邸下に於ける行衛不明。黒田幸雄君の、比島山中に於ける戦病死などが、報道された。今までは何と言つても、東京に集團してゐた有力會員も、地方へ疎開離散して、一室に集まることも容易でない。事務打合せ會も、或時は私の住宅で、或時は松方義三郎君のお宅で行はれるやうな現状である。かういふ移動不安定な状態は、當分づゝかも知れない。

併しいつまでも、茫然自失であることは許されない。一體どうしたらいいのであらう。先づ考へてみなければならぬことは、山岳會設立の當初は少數な「物好きな」

人たちの離散する寄り集まりでしかなかった。或は文學的に、或は畫的に、或は自然科學的に、或は社會文化的に、又は體育的に、山を一つの中心點として寄り集まつたに過ぎなかつた。それが今では、山といふものは、人間が招かずとも、向ふの方から歩いて來て人の心の中へと入り込むまでになつてゐる。最早、啓蒙時代は過ぎた。「山岳會以前」と「以後」とは、それくらゐの一線が、略ぼ引かれてゐるばかりでなく、時勢も舞臺をブシ廻した。

こゝで私はゲーテの「伊太利紀行」を引く。彼は二月十七日に、羅馬の廢墟に遊んで、早春が戸外に訪づれて來たことを言ひ、「かうなると、誰も郊外へ出たがる。今までは、神々々英雄ばかりを弄つてゐたのであるが、今や忽ち風景の場面が廻つて來た」と書いてゐる。本當に私も先づそれを言ひたいのだ。東京でも今迄は、神々と英雄ばかりが、弄られたり、押し賣りされてゐたのであつたが、

今は自然の聲と姿が、人の心に、沁み込む季節と時代になつて來た。もう空々しい神がかり的説教に聴く耳を、人々は持たなくなつた。私共としへも、一意苦心に、心に染まぬ難役を強制されずに、山へと向つて、眞ッしぐらに進むこゝ

目次

- 山へ歸らう……小島鳥水……一
- 歪められた登山思想……二
- 黑場を超えて……林和夫……三
- 感懐……田中薫……三
- 山村畫信……長島重二郎……七
- 敗戦後の私の登山……山田奈良雄……七
- 山の木二三……武田久吉……八
- 冬の高野奥紀行……仲西政一郎……九
- 丸山福喜代氏の追想……田邊主計……二
- 圖書紹介……三
- 夏山便り……三
- 會員通信……三
- 藤島玄・片岡銀雄・今西錦司……三
- 通常總會報告……四
- 會務報告……四
- 小集會・開會通知……五

會務維持に必要な會員の拾收と會費の問題、等、等、數へ來れば會の存在を危うする困難と苦情の原因は、乏しきを憂ひない。阿修羅大王は、燒夷彈の下ばかりでなく、平和回復の今日に至つて一層逞ましく、破壊の猛威を揮ふもの、如くである。考へやうに依つては、山岳會建設當時よりも今の方が、一層又は數倍の惡條件の下に置かれてゐる。先づ據つて立つ地盤が處女地と荒蕪地の相違がある。又譬へば、建設當時は、我々は平原に佇立して、撫でられるやうな山へ、靜かに歩を運ばれたのであるが、今では谷底へ突き落されて、その平原へ這ひ上るすら容易でない。山へ寄り附くごころの沙汰ではないと云ふ様な、手厳しい拒絶を痛感させられてゐる。こゝにいふ山といふ名詞は、象徴的な意義を含めての使用と、取つてもらつていいのである。

そこで、佛教の修養法は、絶對的勢力に向ふ努力であると教へられた。人類間の戦争であるとは申しながら、今となつては、私共は戰禍といふ事實上の不可抗力（たとひ絶對的勢力とまでは言はないとしても）に向つて、努力しなければならぬ。否、山岳會ばかりでなく、國民全體に、投げられた宿命が、それであつてみれば、私共も、甘

受してそれを耐へ、それを善化しなければならぬ。實際、私共は殆ど凡べてを喪失したが、併し主觀的に見れば、凡べてを捨てた人は多大の物を持ってあまゝしてゐる人々よりも、強いのである。赤手空拳で、絶對的勢力とか、不可抗力とかに立ち向ふことは、勞して功なきが如くであるが、無の一字から出立することは、却つて無限の強さを創造することになる。そこに單に山岳會と言はず、恐らくこの時代の創造性が、胚胎してゐる。すれば、自行するのみである。「自行能はずんばいづくんぞ、救ふことを得んや」である。又考へて見れば、過去の山岳會でも、何となく氣が重く、自潰に近かつた時代も無いでもなかつたやうだ。それを思へば、捨てるのは得るのであり、そこから新しい出發と希望の將來が饒けられるのである。

併し、こんな言ひ方では、抽象に過ぎて、具體的な手段方法が、一つも示されてゐないではないかと反問されるかも知れないが、今では根本は人の問題である。人の氣魄氣智の問題である。物は無くても、乏しくても、人は有る。徒らに難局を他に委譲しながら、傍觀者として清談を樂んでゐるやうに、取られるかも知れないが、斯ういふさきに、人間の原高貴性

に信頼しなくて、何を信頼しやう。私は「苦しい時の神頼み」を取らなくて、寧ろ「苦しい時の人頼み」を取る。

最近に受け取つた役員會の通知に依れば、會長及び副會長の推薦も近く行はれるといふことである。理事、幹事、監事、新評議員の候補の顔觸れも定まつた由である。第一歩は既に踏み出された。さうして、一時硬化しかけた山岳會の動脈も、新時代性を強く脈搏するであらうと期待してゐる。それだからと言つて、素より、今から直ちに百歩を跳躍するやうな演劇的な放れ業を、期待してゐるのではない。私共は、足並を揃へてかのマツタアホルンの勇者ウィムパアの、山登りの時の歩き方のやうに、歩々重く、併しながら確かに、徐々故郷の山へ歸るべきである。

今の老政治家、當時の自由思想家、所謂「歌人」ならぬ自由歌人尾崎行雄先生の作歌一首を引いて本文の結びとする。

むらさきのつゝ、じ花咲く里行けば
わが山戀しいさ歸りなむ

（五月十五日阿佐ヶ谷
草堂にて記す）



歪められた登山思想

冠 松 次 郎

戦時中には登山と云ふのは戦争を遂行する爲に山に登り、山に鍛えるのを指したのであつて、それが即ち皇國登山道なりと強調されてゐた。隨て團體で登る、隊伍を組んで登る。而して軍隊式に鍛練する。個人で山登りをする者は直ちに異端者と目され、自由主義者として指彈されてゐた。こゝでは山の自然を味ふと云ふことは殆ど考へられてゐない。

併し如斯は實は山を練兵場と等しく心得、山を手段として利用し、行動したのであつて、眞の登山と云ふことは全くかけ離れた、似而非なる登山運動であると言はればならない。

私等の登山と云ふのは山を手段とせず、これを相手とし、目的として、その表現する大きな自然の中に、私等の全身、全靈魂を打ち込んで行く、それが主なるものである。これは單獨行が最もよく、良きバアテイの場合も亦よい。自由の山に登り、山の快味を味ひ、山の自然に味到する。そこに代へ難い悦樂があり情現があるのだ。勿論戦争のやうな非常過局に處し、非常措置として青年者を鍛練する爲に、最もよい道場として山を利用する事は甚だ効果的であつて、何れの國に於ても、極力これを獎勵實行しつゝ、ありたることと思ふ。併しこれはどこまでも鍛練と云ふ範圍を出ない。前述の如く眞の登山ではない。然るにこれを以て眞の登山なりと僭し、元來自由なるべき登山思想を壓迫し、これを蔑視した、私の謂ふ歪められた登山思想とはこの事である。

更に一つ、その當時全國の登山團體を打つて一丸となし、下から盛れ上る山岳人の力を以て青年者の心身を鍛練し、非常時局の資に供せん企てた全國的の運動が發足した。ところがそれが何時の間にか官僚によつて、軍部によつて歪められ、僅かな官職をもつてゐる者が、己れの職權を利用して登山界に望み、己れの大きな背景を以て上からこれを壓迫し、遂には軍人を首腦とした、民間の團體



悪場を超えて

(登山界再起の前途へ)

林 和 夫

空襲が日増しにひどくなり虎の門あたりがやられたときいて山岳會の事務所のことが氣掛りになつたが直ぐにはどうにもならず三日経つてから行つてみた。あのビルディングもきれいにやられ窓が痛々しく焼け抜けて居た。あれだけあつた本を皆焼いてしまつたのだと思ふと何さ云へず悲しくなり中へ入つて見る氣もせずビルを一廻りして歸つてしまつた。

事務所の塚本さんも日黒で罹災された云ふ。横さんはどうされたか横濱のお宅にお便りしたが不明で返送になつた。先日漸く連絡がつき信州の疎開先から御返事を頂いた。活躍して居られたお仕事も駄目になり、自宅はやられ、傷ついた心は白雪の山々に圍まれつゝも今はたゞ静安を希求するのみとあつて、そのお氣の毒な心事に思はず涙した。

他の登山者と同様私も横さんからは多くの教へを頂いた。少年時代に母がどう云ふつもりからアルパーク附近の新聞地圖を壁に張り速報を見ては今日はこの邊、明日はどこと横さん達の活躍を毎日教へて呉れたのが非常に頭にしみたものだ。之が私の登山生活への踏み出しに大きな影響を與へた。特に身近く御指導を頂いたのは近年になつてからであつただけにこの登山界の大先輩の現況には御同情申し上げその猛奮起の一日も早からんことを切に祈つて居る。

私は今後どうして行けばよいのであらうか。登山精神の根本は素朴な大自然への復歸でありその有り方に於ては好い意味での個人主義の精神であるとしても、登山探検の一つの文化として見たときそこに現れた各民族精神とその民族の盛衰との間に深い關聯性を見出して驚く。これは私が戦前から興味を持つた問題であり北大山岳部會報に二度寄稿し、更に山岳會々報十九年七月號に於て「世界最悪の旅」讀書評に事よせて小さな警告を發したこともあつた。(この號は空襲等のため、會員の手に渡らぬものもあつたらしい。)これを體系づけて考察することは私などよりもつと斯界の歴史に精通した適任の方に譲るにしても、今大戦直前迄の各國登山界を概観する事はこの大戦に於ける勝敗の歸趨に或る豫知を與へるものとして興味深い。更にそれは今大戦の終結によつて暗示的使命を終へるものではなく今後にまで續くものと思はれる。

ドイツ——前大戦の困憊のさなかより立ち上つたドイツの登山界はやがて非常な勢でヒマラヤに多くの隊を送つた。乏しい經濟力を以て多くの成果を上げた。パウワ、メルクル、ウーリン、更に之に續くシュマデラー等をめぐる人とは似てもつかない所謂異質團體をでつち上げた。その爲に元來自由であるべき、新鮮である筈の各人の山岳に對する態度が、たゞひ一時的とは云へ屏息してその跡を絶つたかの感があつた。これにも亦盛れ上がる民意によらず、官僚によつて強壓統制された處に、至められた登山思想を見た。

勿論、この雜音の渦中にあつても、終始自分達の抱懷してゐた主義を枉げず、思想を堅持し黙々としてこの變潮を見送つてゐた識者のあつたことは申す迄もない。

當時私は彼等似而非なる登山人の、あまりに偏狹であり、非山岳的であるのを指摘したが、却つて自由主義者としての譏りを受けた。時代は變轉して今日の情勢となり、やがて山岳界も一陽來復の曙光を見、本來の道を辿り得るに至る。誠に感慨深きものを私は痛感する。

英雄閑日月ありと云ふ。鍛錬を超越し、山に溶け自然に合する。その大らかな氣持を一向に卑下し汲々乎さして馬車馬的に盲動したさう云ふ傾向の裡に敗戦の素因の一つが潜在してゐたものと思ふは非か。

(昭二一・五・一五)

編輯部註 本文は「國民地理」二月號に掲載されたものであるが、田中氏の承諾を得て轉載せしめられた。

感 懷

田 中 薫

昨年十一月の末から十二月初めにかけて、私は暫く日本アルプス東麓の信州常盤村にゐたが、横有恒氏も、今は事業から離れて、同じ村で薪を割つてゐた。左に記すのは、氏を訪れた日の私の感懷である。

妖氣去りて

空また碧し

この國に

山は残りたれど

この里に

鳥飛ばず人語らず

土衰へて

實り乏し

遠山の雲 心易けれど

山の心 いや厳し

この國の民

立上るか 懸

われ 何時の日に

また 山に登らん

々の目覚しい活躍とその美しい友情は若い吾々の血を湧き立たせたものだ。しかしやがて之等の活躍の中に一貫した奥ひのあるのが感ぜられ出した。即ち各遠征隊を送り出すにあたりドイツ的科學、ドイツ的勇猛、ドイツ的忍耐、ドイツ的……と云ふ様によるでヒマラヤはゲルマンの優秀性を試し誇示する舞臺である云ふ様な偏狹な民族自讃が現れ始めた。人々が屈從から脱して自覺と思想の獨立を強調するときは一切の傳統と外部的權威に反抗し之を低く見下し、

己れのみを高くし次第に主我僻に陥り易いものである。近世の日本にも多分にこの傾向があつた。ドイツの場合國民性と結びついて、この傾向は益々助長された。こゝに彼等の鋭きと同時に脆さを見出す。自ら掲げた偏主觀的にしてさかしらなる合理主義に押しつぶされたナチズムは登山に於ても大道とはなり得なかつたのであるまいか？

イタリヤ——ギド・レイの様な立派な登山者を出し、アブルツチ公、スポレト公(ヘムツソリニーに推されてアルパニヤ元首となつたのは同一人であらうか？)フイリツビ等が幾つかの仕事をしたが、之等は國民の一般文化水準には何の關聯もない一部富有階級の試み

と云へよう。ノビレに到つては下劣そのもの。アルプスのイタリヤ側山小屋は乞食小屋の様にきたらしいと云ふのも國民性を示す。(これは日本も大いに恥じて今後戒心すべき問題だ。)大體に於て近年のイタリヤ登山探検界は無氣力無爲であつた云へよう。

フランス——一應勝利國となつた。しかし文學・繪畫・音樂等に高度の水準を誇つたフランスが近年極地、ヒマラヤ等の峻烈な大自然の懷深く踏み入ることにあまり熱意を示さなかつた事は、イタリヤと共にラテン國家の將來に或る豫知を與へるものとして自ら戒心すべきものを感しては居まいか？

イギリス——近代の登山探検界に於ける活躍を顧れば、此國がまだん々衰微するものでない事を伺ひ得たが特にスコット隊の南極行報告の邦譯「世界最悪の旅」を再讀三讀しては誠にその感を深くし讚嘆惜く能はざるものがあつた。この感激は私をしてあの言論の自由な時代にあつて會報十九年七月號の誌上を借りて當時の敵英國に對する認識を改める様に提唱し警告を發する事を敢てせしめた。そこに見出される自然への熾烈なる探求慾・忍耐力・同志愛、しかもあれ程の大事業を行ひながら、終始一貫持ち續ける謙虛なる信仰

的態度はどれ程世界の文化人を啓發するであらう。もはやそれは時代の經過を超越したものである。戰時中譯者の加納さんから「吾々の周圍にボワーズの様な人物がほいですれ」と云ふお手紙を頂いたが、本當にそう思つた。スコット、ワイルソン、ボワーズ、ガロードの様な人物は日本の軍人には勿論のこと探検界にも仲々見出せ相もない。(自分自身のこれに遠いこと誠に遙かなり。かゝる惡文を續けるのさへ恥かしくなる。)

ソ聯——國家として北氷洋や天山脈の探検に相當の力を盡して來た事は衆知の通りである。例のシュミット博士が何かの罪を問はれて失脚したとの報道があつたかと思ふといやそうではなく活躍して居るのだと云ふ噂が立つと云つた有様で判斷の資料を得る可くあまりにも秘密の國、謎の國である。輕々に批判出來るものがある。

アメリカ——戰爭中は直接の相手であり現在はその占領下にある爲吾々が密接に影響を受け、最もよく知りたいと願ふ國であらう。彼等の自然觀を一言にして盡す方法もないと又固定したものでなく人により時代により變るのは當然である。しかし彼等のデモクラシー思潮と世界觀の底流を爲すものにビュリタニズムとフロンテイヤ

ーの精神即ち邊境開拓の精神の有る事に見逃し得ない。彼等は建國以來大自然と闘ひ之を開拓し、人間の用となすため非常なる苦闘を續けて來た。しかも肥沃な土地、良好な氣候、豊富なる地下資源は努力さへすれば報ひのあることを知らしめた。

この事は彼等に自信を與へその衝動に益々拍車をかけさせた。その上彼等は縱横に機械を驅使する優れた能力を持つて居た。之等の事は旺盛なる開拓精神と同時に、人力を以て努力すれば相當の仕事が出来るのだと云ふ樂觀的氣分をも生じ始めたのは當然の成行であらう。同じ經過は彼等のクリスト教にも影響を及ぼし、人間の不完全さと罪に對する自己反省の點に關しては幾分樂觀的となつて來た様である。

登山探検界に於ても同じ様な傾向を伺ひ知る事が出来る。素晴しく大きな特殊自動車や飛行機を持ち込んで圖太く南極の秘密を開いて行つたバード隊は世界の探検界のエポックメーカーとなつた。そのリットル・アメリカの着實周到な準備や、隊長バード自ら單獨で四ヶ月半に亘つて最も困難なる南緯八十度の氣象觀測を敢行して居ることなどを見れば彼等が徒らに機械力を頼りとして居るのではな

く不屈の開拓精神と立派な探検家魂を持つて居ることが何へる。しかし高い山の中腹迄自動車道路をつけ豪華なホテルを建てるなど云ふのは潤滑な氣持の現れとも考へられるが、素朴な自然を愛好しそこに大きな喜びを見出すものにとつてはあまり好ましくないやり方ではない。更にヒマラヤに於て高所キャンプに隊員一名とポーター三名を残して見殺しにしたまゝ總退却した如き拙劣な失敗は、アメリカ登山界のヒマラヤに不悞れなこと、共に大自然が彼等の幾分樂観的な企てを峻拒したのとも見られよう。

最近の報道によると今大戦を期とし、特に原子爆彈が用ひ方によつては人類の自己破滅を意味する事を知りその管理に腐心するに到り、アメリカ全土に素朴敬虔なるクリスト教への復歸氣運が勃然として起りつゝあると云ふ。之は獨り宗教だけの問題でなく、又アメリカだけの問題でもないと思ふ。これだけの悲慘な大戦争のあとには思想・文化の全方面に大きな變革のあることが豫想される。世界は自ら益せんとして機械文明を高度に發達せしめ、しかもそれによつて世界を狭くし自ら苦しむつゝある。今更各國が申し合せて機械文明を後退せさせると云ふ様なセン

チメンタルな逃避が許されぬとすれば今こそ世界の文化人は心靜かに大自然の聲を聞き、人間本然の姿を凝視し、理智的生活の限度を知り、之を裏付ける使命觀に目覺むべきではあるまいか。そして各國が戦傷の癒えた曉には更に自然の懷深く分け入り、之を傷ける事なく、に無限の喜びと教へを汲みとるべきであると思ふ。もはやそれは各個人の趣味だけの問題ではない。登山探検家はこゝろ新しい文化の觸手とも云ふべき存在として困難なしかも光榮ある責務を擔ふものと云へよう。

經濟的にも人的にも比較的損傷少く濫測とした者々しきを持つアメリカが今後の登山探検界に於て開始する活躍には刮目して待つ可きものがある。

日本——惨めな今日の狀態に於て過去への反省は苦き杯である。しかし歴史への嚴正なる回顧批判がなければ將來への正しい方途は見出せぬ。過去への辛直な反省がなければ新しい出發は得られぬ。日本の登山探検界の歩んで來た道を檢討することこそ私の最も望む所であるが、今は紙数が許さず又到底私の能力を以てしては爲し得る所でない、これこそ今後の日本山岳會あたりに課せられた宿題であらう。しかし概観してもそこに

或る著明な傾向は見出し得る。國力の伸展と文化昂揚への輝かしい歩みを踏み出した明治時代には探検魂も旺盛なものがあつた。郡司大尉の千島開發、白瀬中尉の南極行、福島中佐のシベリヤ横斷、日の丸や鐵砲を持たぬ移民群、や、後れて河口師の西藏行等は當時の國民の思潮から遊離したものでなくその多くは全國的關心のうちに爲された。又登山界の先遣連は種々の困難と闘ひつゝ、非常な意氣込みで未知の山に入つて行つた。

大正・昭和と時代の進むにつれて國の富と軍事實力は増し文化は圓熟して來たが、登山探検界も之に並行した内容的充實と外容的發展が爲されたであらうか？ 悲しいかな否。世の風潮は登山探検を文化としては見做さず、次第に之を單に危險で金のかゝる趣味、スポーツとしてのみ見る様になつた。金持は下らぬ事に浪費はしても登山隊や學術探検隊の海外遠征になどは絶對金を出さなかつた。加納さんの極地に關する研究の如きも單なる物好きとして一部の人にしか顧みられなかつた。このこと自身が悪い意味を持つのではない、同時に全ての文化面から高く力強いロマンタイズムが消えて行き低級な實利主義が充ち始めたことが悲劇の原因の一つとなつたのである。學問は極くわずかの高踏的なものを殘して大勢は近視眼的な應用技術に低下し、この兩者の關聯は絶たれ、最後は下らぬ思ひつき兵器への協力となつた。藝術に於てもまた然り。

この間に於て登山界自身も毅然として自らを持す所なく大體に於て上つ調子な時局迎合的變遷を續けて來た。單に趣味性を内容とし高踏的にして非力なる貴族的登山家が居た。之と對立し前衛的科學主義革新主義を標榜して徒らに初登攀を競ひ、新ルートを流り、多くの犠牲を出し、しかも山に入りて山を見ぬ熊の神髓質な一派もあつた。遠征病にまひつかれて基礎的訓練を怠り探検家魂を持たぬ人々が集まつて支那入口の平地に自動車を行かせた。そうかと思ふとヒツケルと一絡に登山家の魂までも東條一派に獻納し多摩川沿ひの平地を夜間強行軍して落伍せぬ者に登山指導者章さか云ふのをやつたりもつたりしたのもあると云ふ話を聞いた。しかも以上の人達が自分だけが正しいのだとして誇り他を排撃し合つた。戦局が次第に白熱化して當分海外へは遠征出來ぬとされるさあれ程流行つたヒマラヤ研究熱はごこかへ消え失せた。全てを廣く抱括して貫く謙虛にして頑健なる高い精神が見失はれたのだ。せめて學校山岳部にだけでも殘し、激流に吞まれ相な自分にとつてもこゝをより所としたく思ひ開戦後に母校の山岳部にヒマラヤイズムを提案したが相手にされそうもなかつた。人は高い理想を掲げて精進しても容易に進歩はし難い。しかも目標を低くすればその目標より低劣化するのだけは無い。海外の山に行ける可能性有無は別として困難な戦争中にも今更にかゝつて榮いて來た貴い美しい登山精神を失はぬ機努力することヒマラヤイズムと名付けたのである。之が實現出來なかつたのは四圍の事情、殊に實際に山に登れぬと云ふ致命的制限の中にあつては或る程度止むを得ぬものでもあつたらう。私自身出來るだけ山に出掛ける機に勉めたが、昭和十九年三月、獨りで五龍から鹿島槍を訪れて見たいと思つて計畫と道具まで送り出したのをマールシャル群島玉碎の發表があつて中止したので、實際には前年十一月の富士が最後になつた。そして誠に恥しいことであるが、その以後は海外の山の勉強にも、心身のトレーニングにも怠惰となつてしまつた。

かくしてあの呪ふ可く悲慘なる半歳を経験し、終戦となつた。登山家の多くは家を焼かれ道具を燒き藏書を失つた。生きて行く事も容易でない狀態に己れを見出して呆然として居るのが現状である。

以上各國及吾が國の登山探検界を概観して來たが之は何を目的として居るのであらう。もし登山探検界の狀態がその民族思潮の一般的方向を表示するに止まり單に豫想的使命とか持たぬなら吾々は唯宿命的事實として受け取り諦め今更も成行きにまかせるほかはない。しかし私はそうは思はぬ。

今こそ岩壁を吹き荒ぶ嵐に負けずしつかりした足場を求め昂然と面を上げて前途を見通し險惡無類の惡場を克服してじりじり光榮の頂上に迫つて行く可きだ。實際には非常なる困難がある。米もろくにないのに何が山だとの聲もあらう。一應もつともに見える。しかしそれだからこそ奮起が要されるのである。登山精神の根本は事態が困難になればなる程奮起し自己の弱さを克服して敢然と闘ふ不屈の頑張りではないか。目先の困難に屈服して低き想ひにつくのでは戦争中の無定見なる時局迎合と何の變る所もなく、同じ愚を繰り返すことになる。登山の價值が主觀的なものである限り何も言と同じ高さ、同じ量の登山を試みなくてもよいではないか。涼とした都會を出てどんな山でもよいから

登つて見ればその喜びがどれ程大きいものかわかる。年齢を加へ家庭的にも社会的にも苦しいことの多くなるにつれてよかれあしかれヒューマニティックになつて行く。しかしこの時にこそ山はあの對社會性の乏しく、山登りだけが人生であつたむきむきな學生時代よりも、もつと靜かに深く強く力になつて呉れるのを覺える。

次に具體的な組織の問題となる。登山の本質から云つても、今直ちに全國的運動は起り得ぬであらう。しかし烈々たる登山精神を持つた人々が少數でもよいから集まつて若の學校山岳部や同志的クラブを復活すればよいと思ふ。まだ消息のわからぬ先輩や同輩にも出来るだけ早く連絡をとる必要がある。そして互ひに競争中の苦難を慰め合つて出来るだけ力になり、過去の山生活の感激を語り合ひ、その中に非があれば検討し、来るべき日に備へ世の情勢を見て着實に實踐に乗り出し、行く。この場合中心となりリーダーとなるべき人物の責任は重い。彼はそのメンバーと共に生きた人格的なものとしての登山精神を考へてゆかねばならぬ。このことは登山の目的が人格陶冶にあるなど云ふ乾からびた意味ではなく、更に登山家は他の人達より偉いとか立派だなど

と云ふ思ひ上つた意味でもない。喜びを求めその中であつて自己を凝視し之を生かして行くことは單にあるがまゝの己れを是認し、わずかにかりの登山業蹟や技能を誇り、小さな役にもまじこめることではない筈である。始めから確固たる登山家としての自分があつてそれが山に登るのではなく、大自然の最も嚴肅な美しい面にふれ之と對比して自己を考へ、この間にあつて敢闘する己れ自身を見出す。本當の山の友情もこの「山」——山そのもの及び登山家のみが知るあの素晴らしい山と云ふ概念——を前にして結ばれる。この時頭のすみのどこかで人間は何時かは死ななければならぬと云ふこと、死ぬと云ふ問題について考へないわけにはゆかない。幾月もかゝつた調査や仕度がつかり終えてさあ明日から愈々大きな山に出掛けるのだと云ふ時になつて、ふと「俺は今度の山で死んでも悔ひはないかな? それにしてはやり残したことと恥しい事が多すぎるな」などと考へながら机の中や身廻り品を片付けて居るあの何気ないしかも嚴肅な氣持である。そして無事で元氣で歸つて來ては又次の山の事を考へて居るのである。それは「はや」好きな山で死ねば本望だ」などと云ふ意氣地のない淺薄な死

生觀ではなくて勇猛心であらう。こうして登山家は次第々々に非常なる謙遜さと勇氣と忍耐力とを以て登山家としては勿論のこと、一々の人間としても明るく正しくなる機不斷の精進を續ける様になつて行くのではあるまいか? そしてこの謙遜な努力はその人の一生續くものと思ふ。かくの如く考へて來れば純粹になることを焦り自己のみを高しとして誇るあの偏狹な排他的態度を捨てねばならぬのは當然である。廣いヘリトつた心で他の人々の經驗とその考へ方に耳を傾け、忠告を聞き、之等を己れの苦しみを通して純化し自己のものとされて行くべきではあるまいか?

幸ひ吾々の手に残つた領土には高い山深い山がたくさんある。先人の通つたコースも新人には依然として新コースである。低下した登山實力には仲々手強い。それだけに喜びは大きい。當分ヒマラヤへ行けなくなつた。今こそ藝術家がその境地への到達の可能性を無問題にせず、唯ひたすらベトーペンロダン、セザンヌを研究する如くヒマラヤ、極地への憧れを捨てず理想を高く持つて山に精進しようではないか。そして何十年かたつて祖國日本の文化が正しい發達を遂げた曉吾々の間から極地へ

ヒマラヤへと充實した探検隊を送り出す事は決して單なる夢でない。次いで日本山岳會の今後であるがこれを過去の様な状態のまゝで存続するのは如何なものであらう。一部少數の自稱止統派登山者が集まつて昔日を回顧する會なれば私的クラブにして置けば澤山だ。若し廣く會員を公募するならば何をより所としてこれをなすのか性格を明示しこれを實行すべきだ。幾つかの仕事が考へられるが、當分の間は登山界の先輩達が經驗と山岳愛を結果して、全國の山が好きだ、山に登りたいと云ふ人々が安全に山に登り正しく山を知る事が出来る様に啓蒙して上げることが大切だと思ふ。又登山道具を一日でも早く出廻らせるなどの具體的問題にも何らかの便宜を見出し得るのではあるまいか。

日本山岳會を意義のある有力な存在とするためにも幾つかの方法があらうが、私はその一つとして支部の數をもつと多くしそれを強力なものとして行くことを提案する。兎も角幹部の方々が集まつて全國の會員の意見をきき、一日も早く再出發されんことを切望する。山の雪崩はもう落着いたらうか? 谷はデブリーでいつばいであらうが尾根筋の雪は一風毎に消え、ゆき、岩や這ひ松が暖い春の陽を浴びて靜かに山の物語を交して居よう。どうも春の山は氣持がよすぎた星の光がうすれて晴れ渡つた朝になつて見ると思ひがけなく全山氷結し、居てどの季節にもない様な素暗しの緊張を味ふ事がある。行程が捗るものも有難い。ゾンメルシーを使ひ快的な泊りを重ねて頂から頂へと漂泊ひ歩ける日の一日も早く來ることを願ひつゝ、筆を擱く。(昭和廿一年四月廿八日)

「山」原稿募集

「山」の内容が各位の熱意のある御寄稿によつて、逐號充實して行きますことは力強く岳界復興の象徴として感激措く能はざるものがあります。本號は十六頁に致しましたが次號は出来れば二十頁達さしたいと思ひます。色々困難な事情もありますが、逐次堅實に増頁して行きたいと存じますので、どうぞごし／＼原稿をお送り下さる様お願い致します。

只今の所山の事情は何も分つて居らぬさいふのが事實でありませう。ですから只一つの紀行がどれほど後讀者の參考となるかは昔日と比べものにはならない筈であります。簡單な事でも結構ですから是非お知らせ下さい。



山村 書信

安永野にて
長島重二郎

ボテボテ實つた青い大麥の上に朝日を受けた爺や鹿島槍がルビー色です。五龍、白馬はまだ霞んでゐます。毎朝布團の中でのこの大きな豪華版を演喫してから起きるので。今の世にこんな贅澤はありません。

(五月二十日)

敗戦後の私の登山

山田奈良雄

長い戦が終わつて久しく待ちわびてゐた平和が復つてきた。しかし平和はみじめな姿で復つてきた。

昨日までは個人の登山の自由までを壓迫して行軍鍊成を呼號しては敵愾心をあふつてゐた人達が、今日は、まるで掌を返へしたやうに登山の再出發となへ、進駐軍との交歓登山などを計畫する節操信念の無いことなども復つてきたみじめな平和の姿である。

私達が戦争の前までは尊敬もし崇拝もしてゐた人達の、この有様は、あさましいことでもあり、情けないことでもある。

だが戦つてゐた昨日も、あらゆる壓迫に耐へて節を屈しなかつた日本山岳會が、満身創夷であるかも知れないが、ともかく今日まで生きながらへてゐてくれたことは私の一つの喜びである。

一日も早く傷が癒つて再び健全な活動を開始することを望んでやまない。

今しばらくの間は、我國の登山家は、新しく開拓の餘地もない限られた小さな國土に閉じこもつておられなければならないが、文化の國として祖國が再建されたときには、戦つてゐた日に考へられたやうな侵略的な意味ではなく、國際的登山家として廣く世界の山々を活動

の舞臺とし、やがては、ヒマラヤや極地の世界人類未知の地域を明かにしなくてはならない。

その来るべき日のために、私達が登山家としてなすべきことは数多くあらうが、先づとりあげられるべき事は登山家の科學的素養の練磨と文化水準の向上であらう。

日本山岳會が將來發展すべき途に、こゝにあるやうに思ふ。日本山岳會は全國の到る所に存在する他の登山團體のやうな實踐團體である必要はない。この國を代表するに足る文化團體としての活躍と發展を期待する。

そして、この私は、震災で失つた住居も家具も、家財も登山道具も、その他あらゆる半生の勞苦の結晶の一切を、再び、とりもどすことも、八年にも渉つて戦争のために無爲に過ぎた年月を、今からとりかへすことも容易なことではないことを知つてゐる。

私は、かかる無駄な努力をするよりもむしろ私が果し得なかつた私の理想を次代の人達に依つて完成されることに希望をつないで若い登山家の科學的素養と文化水準の向上に對するよき誘導者となり協力者となり後援者となり、私が老齢になつて、みづからヒマラヤの登山隊や極地探検隊に参加することが出来なくとも、せめて、その登山隊や探検隊の計畫に參照し、準備にあつての世話役ぐらゐは務めてみたいと思ふのである。



山の木ニツツ

武田久吉

一、キハダ

諸國の山中に生ずる大喬木で、その内皮が黄色なところから、黄膚の意でこの名が與へられ、昔はその粉末を「黄膚の粉」と稱して販賣し、内服又は外用（打撲や傷の薬）とした。主要成分はあの苦い黄連と同じくバーベリンであるから、苦味が甚だ強い。紛末とする外、これを煮て「御百草」又は「陀羅尼助」を製する。

「御百草」で有名なのは本曾の御嶽で、陀羅尼助の名は大和の大峯や當麻寺のものに與へられ、今でもその地で盛に製造販賣されてゐること、思ふ。百草とは本來百種の薬草を採つて、それから作つたものであつて入浴用としては、揮發油を含む織形科の某植物の根などを入れたものらしく、御嶽その他所謂道者の參詣する高山の小屋で、「百草湯」を立てるのを見ることがある。其等の草を囊に入れて浴槽中に投じ、煎汁が湯に滲出するようにしたのが本式である

が、先年上州の迦葉山で經驗したのは、勿論百草湯とは謂はなかつたにせよ、三尺に餘る生のヨモギを、いきなり浴槽の中に入れたので、出入毎に寢にうるさくて困つたことであつた。

内服用の御百草は、キハダを主として、他の二三の植物をも加へるらしく聞いてゐる。然し先年大峯の麓の洞川での話では、この地のは御嶽のと違つて、キハダ一本氣のであるから、一段と勝つてゐるといふことであつた。

陀羅尼助といふ名は、僧侶が陀羅尼を誦する時、睡魔を防ぐために、口に含んだ苦味薬で、黄膚とか千振のやうなものを煮つめて製したものに與へられたのが、本來の意義であると聞くが、當麻寺では、黄膚の皮を煮つめる時に、陀羅尼を誦するからだ、誠じやかに教へて呉れた。百草を集めてそれ等の效力を十分ならしめるものと反對に、キハダのみで混り物がなから上等だと説明するのとは相似

て、口は寢に重寶なものであると感心せざるを得ない。そして當麻寺の用水は、役ノ行者の穿つた井戸のださいふが、餘り清澄な水ではないやうに見受けた。

それはさて置き、貝原益軒先生の『大和本草』を見るに、「黄藥」其木の皮黄なるゆへ名づくはだは皮膚也本邦處々に之有實をシコノヘイと云變語なるべし胡椒に似たり味苦きゆへ蟲を殺し腹痛を止む葉は槐及苦木に似たり」とある。

小野蘭山先生の著『大和本草批正』に、「四國米は藥店の名なり變語に非ず」と訂正してあるが、藥店の用ひる「四國米」の文字は勿論無意味な當字で、シコノヘイは矢張り日本語ではないのである。然らば何處の詞かといふに、嚴密にいへば、このキハダではないが、それに近縁のヒロハノキハダ一名カラフトキハダを、アイヌ語でシクレベニと稱する。これは木の名であつて果實はシクレベである。

それが訛つてシコノヘイとなつた譯で、更に訛つてシコロとなり、北海道では往々それで通用する。

二、カバ

カバ又はカンバには種類が多く區別の簡單なものもある一方、中々面倒なものもあるし、又山民の與へた名稱と、學者の用ひるものと、旨く合致しない場合もあつて、

混亂の基となるものが少くない。カンバといふ名は關東や中部地方で多く用ひられるやうであるが、奥羽地方では之と同義の語をガンビといふ。

さて單にカンバミかガンビといふ場合、總稱してその類を漠然指すこともあるが、嚴格にいへばシラカンバのことである。

シラカンバを訛つてシラカツバといふこともあるが、富士北麓では單にシロキと稱する。變つてゐるのは奥上州の片品村で、ヘロノキと呼ぶのは、恐らく樹皮が燃える時の容に由るものであらう。信州の佐久や小縣では、シラハリミと稱してクロハリに對立せしめるが此地でいふクロハリとはヤマハンノキの事である。シラハリの名はまた甲州北巨摩でも用ひられるが往々サウシカンバともこの名で呼ぶことがある。

サウシカンバはシラカンバとは全く別の種類で、餘り似ては居ないのだが、諸方で之をシラカンバと誤認してさう呼ぶことが少なくない。甲斐北巨摩郡の柳澤から大武川を溯り、やがて川を離れて早川尾根に向ふ途上、海拔約一九〇〇米の地に、シラハリ平と稱する緩斜面があるが、そこに生へてゐる巨木は皆サウシカンバである。シラカンバは一五〇〇米が多くも

一六〇〇米以下の地でないと見られない温帯の樹種であり、サウシカンバはそれ以上に本據を置く木であるから、一九〇〇米内外のシラハリ平にシラカンバはありやうもない。尤も但人も、本當のシラハリではなくて、シラハリヨギンであるのだと、説明はするが、その名義は、シラハリにも似てゐるし、ヨギンにも似てゐるの故に、斯く名づけるのだといふ事である。

此地でいふヨギンとは、信州川上村あたりでいふヨギン、即ち稻子附近でいふヤヘガハミか、ヨクツミネバリ即ちミヅメとも異つて、ネコシデ一名ウラジロカンバのことである。

信州下高井郡の平穩村では、カンバの類をサウシと呼び、シラカンバをカンバザウシ、サウシカンバをタケザウシと稱する。サウシカンバをタケザウシと呼ぶのは、その木曾方言タケカンバ、飛騨方言タケシカンバと相類する名稱である。この木を甲斐の東山梨や北都留では、ブタまたはブタカンバといふのは、寢に變つた名である。この名は隣接する信州の南佐久でも通用するが、八ヶ嶽を隔て、西の諏訪郡では、この名は用ひられることなく、アッサと呼んでゐる。それから、下野の那須では之をサツチラといふ。

カンベの類中サウシカンベは、シラカンベよりも遙に大きくなる種類で、胸高直徑一米にも達するものすら稀にはあるが、是に伯仲するものにウダイカンベがある。これはこの木の樹皮に含まれた蠟質物及び油脂のために、皮が中でも能く燃焼するので、鵜飼の炬火に用ひられるから、木曾や飛騨で斯く呼ばれるのである。日光から南會津にかけては、サハダ又サイハダ、訛つてセイハダとも謂はれるが、名義は遺憾ながら明かでない。或は曰ふ、樹皮を裂いて炬火に用ひるが故に、サキハダの音便か。是も確證がない。又岩代信夫郡では之をテラシと呼び、信越界の秋山ではブニユウと稱する。

上州吾妻郡の六合村では、これこそカンベ中のカンベさでもいふ意味か、マカンベと稱し、樹皮を剥いで屋根を葺けば、能く百年の水きに互つて腐朽しないといふ。この名はまた北海道にも輸入されて、同地でもこの木をマカンベと俗稱する。然るにどういふ間違か白井博士はナガバノシラカンベと名けられた特立の一種にこの名を用ひられたので、牧野博士さへそれをそのまゝ踏襲して居られるのは、千慮の一失とても謂ふ可きであらうか。

ナガバノシラカンベは、日光大

平に多く産じ、又上州片品川上流から尾瀬にかけて分布し、更に木曾駒ヶ嶽の二三合目にも生じてゐる。然しその産地では恐らくシラカンベと區別することなく、従つて方言の如きはない事であらう。樹皮は銀灰色でやゝ光澤があり、真正のシラカンベが、純白色で光澤の無いのとは、全く趣を異にしてゐる。そして果實の直立する事サウシカンベと揆を一にする。

三、ドングリ

山の木といふには或は適當でないかも知れないが、序を以て近事食料として流行の兆あるドングリの名稱について少し許り書いて見よう。この木に普通「團栗」の文字を當てるが、正否は確でない。本來はクヌギの果實で、植物學上「堅果」と名づけられる種類のものである。東京には本物があまり無いので、シラカシや、アカカシの實を普通にドングリと呼んでゐる之を食へば吃になると一般に云はれるが、滋味のあるが爲であらう。然しこの澁を去り搗いて餅にして食へば痼疾に效があるといふのは多分收斂性を利用するのであらう。

さてドングリには色々の異名がある。『本草綱目啓蒙』によると、『和名鈔』にも出てゐるツルバミを始め、但州のジザイ、信州のジダングリ、上州のジダンボウの如

き則ちそれである。その中ジダングリとジダンボウのジダンが同じものである事論する迄もないが、但馬のジザイも亦これから出たものらしく見受けられる。尙諸國の方言を比べて見ると、ジザイボといつて但馬のジザイにボの附いたのもあれば、ジナンボ（信州南佐久）といふもある。その他數例を次に掲げる。

シランボ（南佐久）

ジダツボ（下總北相馬）

ジダイコ（丹後奥郡）

シランボ（信州上田附近）

ジダランボ（下總印旛）

ジダンボ（武州埼玉、下總古河、常陸結城、下野栃木）

ジダングリ（常陸多賀）

シードメ（遠州小笠）

シダミ（陸前仙臺、陸中閉伊、江刺）

スダミ（陸中岩手）

ズンダ（岩代北部）

ズンダグリ（羽前村山）

ズンダングリ（同右）

ズンダンボ（同右）

ズングリ（甲斐東八代）

デングリ（名古屋）

ツウケイ（長崎）

ヅンゲイジ（肥前藤津）

ドウケイ（筑後）

ドンクミ（大分）

ドングリは果實の名である。然



冬の 高野奥紀行

仲 西 政 一 郎

らばそのなる木は何と呼ばれるかといふに、ドングリノキといふ所もあり、ジダンボノキと呼ぶ土地もあるが、往々實と同名で區別がない。これはナシノキ、モ、ノキ、クリノキ等といふ可きを、略してナシ、モ、クリ等と稱する

邦俗に由るもので、歐洲語ならば許されぬ處である。その他はクヌギと呼ぶのが最も広く通じるが上州館林の附近ではゴボウナラと呼ぶといふ。そして又下野塩谷郡大宮村では、ドングリと呼ぶにクヌギノミといふと聞いてゐる。

高野奥の護摩ノ境山から神納川の大瀬平に降り度いとき、野迫川村の玉谷氏に積雪状態を訊ねると、今年は例年に無い大雪で、と返事が来たので、大瀬平行きは春に延すこととして、荒神から伯母子岳に登らうと、山本宏君を誘つて出かけたのは二月九日だった。

標高八六三米といふ、高野山の終點に降りると気温は零下二度、地下足袋を履き、かけて来たので足指は聊か冷たい。

積雪は二〇〇程だが、バスは不通とあつて女人堂まで、ぐる／＼とバス道を歩く。女人堂前の斜面では、地元の學生達がスキーを

愉しんでゐた。冬の高野の町通りは、森閑として寂しかった。ここに敗戦後の今日では團體客も影のだらう。各寺院からは鐘の音も聴えず、大きい氷柱の列のみが、門前に佞びしく光つてゐた。

ある。

峠を踰え、荒神辻を過ぎ、二十
七丁茶屋の軒端で、一息入れ、
キヤラメルとテルモスに元氣を
つけて、最後の登りにかゝつた。

荒神の参籠所に著いたのは十時
過ぎだったが、雪の中をようこそ
さ早速圍爐裏にぎんぐ炭火を足
したり、湯を沸したりして貰つた
ので、身も心も忽ち温まるのを憶
えた。その夜の泊り客は私達二人
のみで、雪の爲めに電燈は故障で
ランプの下、檟炬燵に足を伸して
眠りに就いた。

明る朝、顔を洗つて、まづ一二
五〇米の山頂に登り、三寶荒神社
に参拜する。氣温は零下六度、大
峯方面はガスのために展望は利か
なかつたが、金剛、七霞、矢放峠
邊りの重疊たる山脈が、鹿の子斑
に雪をかぶつて、魅惑的な眺めだ
つた。

朝食後、社掌の林氏や、舊知の
西前老と戦後變貌した世相につ
いて暫く語り合ふ。このやうな山村
でも、供出は強制的で、相當苦痛
を甜められたらしい。玉谷氏も、
私の應召中村長を辭められ、現在
は立里の平尾氏が代つて就任され
てゐることも初めて知つた。

九時すぎ、参籠所を發ち、火打
岩谷を降つて北股部落に出る。こ
ゝでは最近、檜下駄の製造が副業

として盛んなやうであつた。

澤垣内の一軒家は、今は製材所
となつてゐた。その側を過ぎ、樵
夫橋を渡ると、すぐ前面に小さい
隧道がある。しかし、内部が崩壞
してゐて高廻りをせねばならな
かつた。川原樋川と北股川の合流點
に、牧林業所の出張所が建つてゐ
た。その飯場小屋の圍爐裏を借り
て、雑炊を作り、書簡をこつた。

小屋を出て、いよいよ伯母子へ
向つてコノ谷逕を登る。ところが
この途中の分岐路で、右をとるべ
きを眞すぐ突き進んだため、山腹
の開墾畑にてて行き詰つてしまつ
た。深谿を隔て、前方に登路を望
みながら、雪が深く、どうにも
突つ切つて出られない。迂回を覺
悟で、畑の上方の逕を進んでみた
が、是も谷奥で消えて仕舞つて行
く事が出来ない。仕方がないから
針葉樹の斜面を攀ちて尾根に達し
たが、既に夕陽迫る五時である。

目指す伯母子の山頂へはまだ二時
間はかゝるであらう。残念だが再
舉を期して山を降ることにする。
百糧餘も積つた雪の吹き溜りの
急斜を、雪達磨のやうな恰好で、
くゞり抜け元の開墾畑まで戻り、
さらに、夕陽の坂道をぎんぐ飛
ばして、やうやく平部落に着、玉
谷氏のお宅にルツクザツクを降し
たときは流石にホツとした。

折から玉谷氏は村用で不在だつ
たが、奥さんや復員されてゐた御
子息等から、いつに變らぬ親切な
待遇を受けたのでうれしかつた。

この夜、村の學校では青年團の
演藝大會が催されてゐたが、私達
は爐邊で濡れ物を乾かさればなら
なかつたので見に行かなかつた。
村では今年も陰曆正月を迎え
らしい。私達は、奥座敷の、美し
い餅花を枕邊に仰ぎながら楽しい
夢路を辿つた。

翌朝は、珍らしい栗餅の雑煮の
馳走になつて玉谷家を辭した。
高野山へは、北股を経て行けば
近いのだが、私達は土産に、壺杓
子を買ふために迂回して北今西の
部落に出た。壺杓子とは、栗の材
で拵へた杓子で、野迫川村では、北
今西で二軒作つてゐる家があるの
みである。

山の物價も、終戦後は随分騰つ
て巷の相場と變らない。壺杓子も
二年前に相ノ浦で買つたときに較
べて十倍餘の高値だつた。

村の鎮守の杜を左に見て、岩谷
添ひの登路を辿る。どうしたこと
か腹がちくちく痛み出す。山で腹
痛を起したことはない私にとつて
初めての酸い體驗である。雪の中
を無理したためか、或は思はぬ馳
走に、胃の腑が吃驚した結果だら
う。水ヶ峯では、中谷さんの宅で

少憩をとり、梅干茶を貰つて暖を
こつた。こゝの息子さんは、私達
と同じ堺市に居られたが、お氣の
毒にも罹災されたのだつた。

水ヶ峯といへば、今では二軒し
かない山頂の部落だが、元は八戸
の部落であつた。そして三十年程
前迄は、高野一熊野を結ぶ往還路
に當るため、ときには、遠く奥州
邊りからの團體客などの泊りがあ
り、相當榮えてゐたのだつた。し
かし紀勢西線の開通を見てからは
客足は殆ど無くなり、それに伴う
村人の移住もあつて、かくは淋し
くなつたものである。高野奥から
吉野奥にかけては、十津川村の北
海道大舉移住を筆頭に、村人の移
住の行はれた所が、此所彼處と見
出される。それには、未開の地を
目指して開墾に出るものと、華や
かに開けた都會を憧れて村を離れ
るものと、或は淋しさに居た、ま
れず、附近の大部落の知己を尋ね
て移り行くものといつた風にその
原因と目的はさま／＼であるが、

高野奥では、先づ雪の來るのは
伯母子の頂きであり、次が荒神ヶ
嶽、それに次で、この水ヶ峯であ
るといふ。なるほど標高からいつ
ても僅かの差こそあれ、この順位
だから村人の觀察は鋭い。昨夜泊
つた平なども、畑へ行くためには
深い谷を渡つて難路を登り直され

ばならないから、全く一寸行くに
も一日仕事だが、この水ヶ峯では
何分、針葉樹に圍まれた狭い尾根
すじの他は、拓くところがないの
だから、冬など畑に雪に埋れて全
然手がつけられず、自給の途がつか
ないのである。開きを求め、稔
りに憧れて山を降るのも亦人情の
然らしむるところといふべきであ
らう。

水ヶ峯から北へ降ると大瀧の部
落につく。この部落ではどの家でも
杉箸作りが盛に行はれてゐた。
紀伊續風土記に「兩口片口の白箸
杉箸揚枝並に山郷十津川邊にて家
業として箸を削る」とある、兩口
の杉箸である。なほ、白箸は一名
水木箸ともいつて眞白い美しい箸
であるが、是は今では素材も少く
なつたし、製造工程に手数を要す
るので、殆ど作られてゐないさう
である。

大瀧橋を渡り、薄峠へのザツグ
ザツグを登る頃、小雨が降り出し
た。高野山近く、國有林を縫ふ山
道では、薄暮の中に鶯の籠鳴きが
聴えてゐた。

(参照地圖五萬分一
高野山・伯母子嶽)

★ ★

★ ★

山案内

丸山鶴喜代氏

の追想

田邊 主計

細野の人たちには昭和十八年の五月以來會つてゐない。戦争のためと父の病氣といふ私だけのわけもあつてその前年の正月休日に出かけたり何處へも行かずにゐたが、数日の休暇を得て細野へ行ったのであつた。そこから一人で小谷温泉へ行つたり、小日向山へ登つたりした。鶴喜代さんの家の前で暮れて行く五龍の方を眺めながら話したのはその時であつた。食事の時間が来たので別れてやつかいになつてゐた。與兵衛さんの處へ行き、夜また鶴喜代さんの家を訪ねておそくまで爐傍で話してゐたのであつた。これが鶴喜代さんに會つた最後であつた。

鶴喜代さんは昭和十九年の一月八日の夜になくなつた——十日程床についてだけで。私は一年以上もこの事を知らずにゐた。昨年五月會員の盛岡氏への與兵衛さんからのたよりで初めて知つたのであつた。例年ならば出かける正月や四月に、山へでかけられない残念さを書いて出した手紙に返事の

なかつたことも忙しいからかと氣にもかけずにゐた。私の方も一昨年九月に父を昨年三月に母を失つた悲しみの上に、日夜空襲に生命をおびやかされ、しかも國民は殺される覺悟さへしてゐればいゝんだといふやうな扱ひを日々受け、實にたまらない日々を送つてゐたのではあつたが、折々山々やその地の人々の事を想ひ出し、いつしよに歩いた友人などに會ふと「鶴喜代さんはどうしてゐるかなア」などと話しかけたのであつた。そんなに早く三十を越したばかりで死ぬさは、戦争で殺される以外には、想つてもゐなかつた。

私が白馬の方へ行き出したのは續いて立山の方へ行つてゐたあとで、昭和七年（一九三二年）あたりからであるから、せいぜい十二年にしかならないけれども、その間たびたび出かけいつも細野の人たちの世話になつた。

鶴喜代さんと長く歩いたのは與兵衛さんといつとよに三人で飛騨から入つて槍見温泉に一泊して双六小屋へ行つた時である。昭和十二年四月であつた。天候が悪くなり双六に停滯したため笠ヶ岳へは行けず烏帽子へ出て細野へ歸り與兵衛さんの處で三人で烏鍋を食べたりした。そして二晩世話になつた後杓子尾根から白馬に登り又三

人で本地屋へ降りたのであつた。鶴喜代さんは與兵衛さんが年上でもあり、山の経験も多いので道中も素直にいろ／＼山の事をきいてゐるのを私は好感を以て眺めた事を想ひ出す。それから大い興兵衛さんか鶴喜代さんを頼むやうになつたが、一つの山歩きを共にすると次の計畫を話し合ひ又一しよに行きこいふ風に、あさでも鶴喜代さんと出かける事が多かつた。

昭和十五年四月には白馬から北陸へ出る計畫が途中で駄目になり同じ月の末に大瀧山と乗鞍へ行つた。翌十六年には三月に御岳へ、四月に笠ヶ岳へその月末に又杓池へといづれも鶴喜代さんに来て貰つたが、二人きりで歩いたのはこのうち小谷温泉から焼岳を経て笠ヶ岳へ降りた時であつた。會報一〇五號に記したやうに、金山で一泊の翌日は笠ヶ岳に簡單に着く豫定が、温泉の直ぐ上まで来てゐて濃霧の爲め降路が解らず岩かげに天幕をはつて二晩すごしたのであつたが、燃料も食料もなくなりやつと晴れた翌日温泉の近くでもう安心だといつて残してあつた林檎を二つに分けて食べたのであつた。その時前年より損つた白馬から北陸へ出るのも焼岳から火打を

経て笠ヶ岳へ出るのも、大瀧山や御岳の再昇等もその時初めて持つて行つた輕天幕を使つて次々にやつて行かうと話した合つたのも今は淋しく計畫だけが残されてゐる。鶴喜代さんは頼まれたからといふだけではなく、山歩きをほんに楽しんでゐた。そしてまだ行つたことのない所へ行くことをよろこんでゐた——そういふ方が山案内としては苦勞が多かつたこと、思ふ。又私自身もはじめての所へ地圖を頼りに行くことを好んだ。山歩きに於てからの苦勞は時がたてば回復する。精神の打撃はいつまでも残るのである。私は人一倍小心に同行者との不調和を警戒する方であつた。細野の山案内には與兵衛さんにして、鶴喜代さんにしては夏冬の山歩きに實力があり又信頼の出来る人々がある。私はいつもはじめに私の計畫を述べて相談をしてから出かける。そして出かけた以上この人たちは途中で別の事を言ひだしたりする事もなく初めの計畫をだまつて進めて行くことが誠に氣持がよかつたのである。鶴喜代さんとの十回餘の山歩きに於て難澁の場合にも一度でも浮かない顔になつた事さへ見た事がなかつた。二人きりの小さな天幕で数日くらゐてもいづれも楽しく話のきれる事もなかつた。他の山案内に時々見られるといふ客に迎合するやうな事は全くなく常に明るく又節度があつた。私は友人たちにこの優秀な山案内を推薦することなうれしく思つてゐた。そしてそれらの友人も同じ印象を受けた。山案内としてまだまだ春秋に富んでゐたのに誠に惜しいことをした。

私は鶴喜代さんとの山歩きをなつかしく思ひ、自分のことを書き過ぎた。細野の人々にはさより、私よりも鶴喜代さんと親しく山に登つた人々も多いだらう。どんなにその人々が淋しく思つてゐるかさかと思ふ。

鶴喜代さんの家族をまだたづねてもゐない。年とつた父親もお元氣に、夫人はいまハツの男の子と五ツの女の子の成長を樂しみに丈夫に働いてゐます。長男は今年初等科に入りましたが、鶴喜代さんがゐたらどんなになるこんだ事かと思ふさ、家族の様子を探れた私の手紙への與兵衛さんからのたよりにあつた。そして、ふるく河野氏が白馬へ入つた頃同行した父親のことや淋しくのこされた夫人や子供への心遣ひさ細野のクラブ（山案内仲間）でつくつてゐるスキイクラブも鶴喜さんと護さんがなくなつて光を失ひさしたと細野の悲しみはたよりに滲み出てゐた。

私もこれからはなく山の事を想つて暮らすことであらう。そして鶴喜代さんのことはなかく心に、かりに山へ登れないからだになつても、いつそすぎ去つた幾つかの樂しかつた山歩きと共になつたく想ひかへすこと、思ふ。

いま私は日々多くの人々の中にままれて暮してゐる。しかし、それらの人々の中に味方と思ふ感じのするものは極めて少ない。そしてこの少ない味方を今はここに大切に思ふのである。行けるやうになつたらまづ細野へ行きたい。あの大きな目をして少しせき込んだやうな調子で話す鶴喜代さんは細野にゐるやうな氣がする。

(昭和二十一年四月)

圖書紹介

アンドレ・シヤンソン

四つの要素

山と風と

太陽と泉

堀口 大學譯

「山と風と太陽と泉」の中には五つの話が含まれてゐる——エグアル登攀記、敵、白い獸、他國の女、言葉の力。このうちで「エグ

アル登攀記」と「他國の女」とが山へ登る話である。あさがきに譯者は「エグアル登攀記」は、けだし山岳文學の絶品たるを失はない好文であるとして記してゐる。これは少年が二三の友人と連立つてエグアルへ、麓の家を夜中に出て天候を氣にしながら山頂へ向ふ話であるが、書きはじめの數行によつてこの物語が如何なるものであるかが窺はれる。

「あの山中、あの高いエグアル連峰中に、少年僕は、見出したものだ。他所國の少年なら、冒險譚や戦記物に求めるもの、別な言葉で言ふなら、神話の寓話的な世界に對するあの憧憬と、個人としても、また民族としても、ただ傳説でだけ満たされる生命の實證的なあの最初の體驗とを。」

彼等少年はエグアルに對してかう思つてゐる。「或る地方、或る一國、一町村にとつて、このやうにその土地の上に君臨する高山を持ち、そして水により、風により太陽の運行によつて、その住民の生活が調和され、指導されて行くさいふ事實は、何たる幸福だらうか。このやうな土地に在つてこそ、始めてヒロイズムを反映する少年期も可能な譯だ。」彼等は登攀の肉體の努力と快感、不安と憧憬、而して目に映する風物につい

て感動し思索する。山麓の風物、住民の生活を通じて「今に傳はる原始生活の様式が、偶然にも彼等に大人にならうとする瞬間の青年等にさつて必要な神秘的な喜びを與へるのであつた。」

讀者はこれらの少年の思索に溶け入り自らの少年期への「郷愁」を感じないだらうか。然して、一さき、彼等と共に山と風と太陽との接觸を身に感じないだらうか。《現在この國に於てわれわれの身のまわりを包む、それらとは異なる「要素」は多くある——不潔、病氣、貧困、饑餓、犯罪、不正直、そしてあらゆる點での、みすばらしさ。かつては我等も、殊に、山を好む人々は、土、風と太陽、そして水それらの要素を求めて山へ登つたのではなかつたか。》

「他國の女」では山麓の小市に於て五人の男の子——そのうちの一人、この話の主人公は十八才になつてゐる——が停車場の附近でシガレットをすばす吸ひながら毎日何かを待つてゐる。「この小市を世界の他の部分へつなぐこの列車が、今日こそは、何か新しいものを齎して、僕等の生活を、急に一變させることが出来てもするかのやうに思はれるのであつた。」しかし、同じ退屈、同じ孤獨な毎日がブラマナスの木の下で續く。或

る日一人の女の旅行客が降りる。他國の女である。「大した美人だぞ！」と一人は叫ぶ。颯爽として靴一つを片手に提げて彼等の前を通り過ぎる。その日から彼女を這巻にして彼等は夢中で夢みる。認められやうとする。しかし近づき難い。やがて一人が近づく。

「あなたはよく山の方を眺めておいでですが、若し案内人が御入用でしたら」と案内人をついて出る。そして遂に山小屋で、この三十を越した、「あなたのやうに、多くのものを期待する年齢は過ぎました」といふ婦人と少年期の眩惑から醒めやうとする少年とは、二人だけの夜をすごす。

私は近年、少年から青年に移る頃を題材とした話に、今までより一そう感動するやうになつた。——或る箇所では思はず涙さへ。——年をとつたせいかもしれない。しかし、讀んだものはいづれもヨーロッパのものであつた。ロジエ・マルタン・デュ・ガールのチボー家の人々、ヘルマン・ヘッセのデミアン等。日本の小説でこのやうに少年を扱つたものがあつたら讀みたい。或ひは無いのではない。少年の精神の發展を丹念に書いて行く力を持つ作家があつたのか、その様な小説を人々が求めないか。又はこの民度の低い、しかも、戦

争の多かつた國では、若い人々を枷にはめ、何十人、何百人一束に「訓練」を強制して個人の精神の生長を極度におそれ、その阻止に努めて来たのではない。人々がかゝる少年期を持たず、又かゝる少年もゐないのではないかといふ疑ひをまづ私の身のまわりに對して抱く。

「山と風と太陽と泉」は、一九三五年十二月に出版されたアンドレ・シヤンソンの「四つの要素」(レ・カトル・エレマン)の譯である。この力強くしなやかに美しい譯文は、フランス語の感覺を身に付け豊かなヴォキャブラリを有する人によつてなし得る業(わざ)ではないかと思ふ。堀口氏の説明によればシヤンソンは一九〇〇年生れた「大戦直後の世代を代表する佛蘭西文學の最も才能あり未來ある新作家の一人」である。

本書が刊行されたのは昭和十一年、第一書房からであつた。當時これを紹介したいと思つてゐる時を失した。今回リプリントして新たに出版されたので、この機会をとらへた。今度の版は現在の日本にふさわしい、ザラ紙のきたならしく粗末な本であるが、値段は舊版の六倍餘である。(一九四六年五月田邊主計)昭和二十一年一月北斗書院刊行・定價七圓五十錢

夏山便り

黒部便り

黒部保勝會長

吉澤 庄作

こ、數年間、自然凍結の状態にて殆んど休眠中であつた黒部も、

一陽來復とは申すものの、今日の世相にては第一に食糧問題。第二にガイドの事などを考へさせられると、戦前のやうな計畫立ての探勝旅行など、一寸金で譯には行きません。只ガイドなしで熟練の人達が、各自にて物資調達と運搬の可能範圍に於ての、力倆考慮の上の旅行ならば一向差支はありません。物皆戰禍の災厄にあがいてゐる裡に一草一木の傷つけられたるはなく、それこそ年と共に大自

然の偉力を誇示してゐる黒部の秘境こそは、今後復興日本の更生の爲の一大資源たるばかりでなく、國際的に探勝客の吸收資源として國際貸借に資すべき無二の寶庫だと信じてゐます。勿論それは今後國勢の復興と共に、國交の回復を待つべきだが、それにはあらゆる施設投資を要すべきはいふまでもない。只今日の處では、單獨旅行者の各自可能な範圍を出づる譯にゆかね事は止むを得ないので。一、日本發達電の專用鐵道の一

般旅客便乗は六月上旬頃より

一、黒部温泉の開湯は六月上旬頃より。鐘釣温泉(新鐘)略同様。祖母谷温泉賣店は七月上旬より開始の見込。

以上各温泉場には物資販賣の見込ないから、各自必要物資は携帶を要すること。

一、清水小屋(祖母谷温泉より白馬岳への途中)は人があな

いが使用可能の見込。一、坊主小屋(猿飛より池ノ平への縦走途中)の使用は不可能。

穂高小屋より

今田 重太郎

拜復 昨年穂高小屋へ行つて少しばかり居て來ましたが、淋しいもので、早々下山。今年はどんな機に行くものか分りませんが、小屋は開く豫定であります。營業は今まで通りに致し度いと思ひますが、但し食糧だけは御持參下さる様にお願ひ致します。小屋開きは七月幾日位になるか一寸不明、其後分り次第御通知致します。

編輯部註、この外に、立山、針ノ木、槍、常念方面に今夏の様子を問合せ中なるも未着。六月一日

會報

會員通信

四・二五 藤 島 玄

頻りと拍動する明るい天幕の中の夢現の暫くに、外で木を切刻む音が春山の暮營の階調を快く傳へる。と煙戲する兒女等のさざめきに、寄り掛つた布團から移す眼に瀬戸火鉢、置燭臺、手紙束と世帯道具や事務用品が映り、櫻を散した吹流し春風と共に、炊事の煙が青白く流れ込んできた。

それは戦災以來天幕で越冬した日本山岳會東京都中目黒の假寓事務所の風景であつた。

三百坪計りが焼夷彈に綺麗に焼けて、三方は民家に圍まれてゐるが、西方は圓光東漸大師靈場淨土宗長泉院の寺内を取入れてある焼跡にその天幕がはためいてゐる。

南の高低丘に石垣を廻らした墓が見え、明和四年銘の梵鐘が牛身を現す鐘樓へかけての斜面の疎林には、恐ろしく丈の高い松、樺、檜等の中に銀杏、楓の新緑が特別に鮮かである。寺の本堂は餘程昔から建つて無いらしく、庭の五重の石塔が青桐や藤の一群の中に整つた形を見せてゐた。そうした寺

内の背景は、巨大なガスタンクが厳しい鐵板と鐵柱を張廻してゐたが、燒跡の境界の笹藪の下には葎が白い花を戦かせてゐる。それでも天幕の片側は、焼瓦や鐵屑を片寄せて幾畝かの畠が作られ、青い双葉が點々芽をふいてゐるのは微笑ましい。

我等のスキーヒュッテとも謂ふべき越後國北蒲原郡津川奥の日光寺の用作で大阪へ出張し、岳友の案内で高取城跡から談山神社、翌日は吉野山奥の千本と近畿の山の片鱗を窺ひ、丸い山腹の急傾斜や草木の花の渺いのに一驚したり、好しい石佛をザツクに入れてみて出してみて苦笑したりして興じ、其足に東上して、日本山岳會發會以來因縁の深い新潟で、會報「山」復活第一號とも謂ふべき第百三十三號の印刷を塚本繁松役員と打合せに、初對面の吉田勇氏の案内で此處の天幕を訪れたのであつた。

お定りの戰災談から食糧配給難住宅照明難、資金封鎖難、會員調査難等々が根底になつて、縱横に展開する難問題の山積する中に更生日本山岳會の指導、組織、企畫經營と、凡る不便不備を苦にせず真正面から取組んで行く塚本氏の熱情には自ら頭が下つた。

天幕の中へ魚を焼く香と、瀬戸物を整へる音がしてきた。私は會

員諸氏に率直に訴へる。第一には特に地方の新會員の大量入會を勸奨して欲しい。第二には清新なる復興運動として、會報「山」及び「山岳」の刊行の爲原稿を送る。第三に會費納入及山岳圖書、地圖等を寄贈して、灰燼に歸した圖書室の充實を計る。以上を當面の問題として協力を乞ひたいが如何のものであらうか。賛同を得れば個人として即時に出來得ると思ふ。

最後に「山」をよく讀んで頂きたい。あの精悍な塚本氏に、御願ひ致します。なる文章を幾度も、幾度も記させぬやう、私から、御願ひ致します。で訪問記を終る。

片岡 銀雄

前略 いよいよ事業再開となり嬉しく存じます。次に小生の状況を御報告致します。昨年五月二十五日東京の青山・澁谷の大部分がやられました。夜は、遠く横濱から家も山手の高臺にあつた事としてよく見え、今夜は大部分範圍で而もエレクトロンが大部分壊れた様だなどと言つてゐました。翌廿六日早曉電話で起され、三日間位泊る豫定で直に東京へ救護班に出動せよとの事、朝食もあわて、山登りのやうな仕度でトラクにて

出かけ東京都の指令により澁谷に救護所を開設應急救護をやり、都

の都合で豫定が變つて當夜歸るこ
とになりました。其際トラツク上
から青山・四谷・澁谷と始めて空襲
の跡を見(三月十日の時から救護
班は出て居りましたが、私は其時
が始めてでした)之はなか／＼の
ものだから自分の家の方も疎開し
なければ駄目だ家の者に話した
りしてゐて、翌々の廿九日に早速
やられた譯です。廿八日が病院の
當直だったもので、廿九日そのま
ゝ歸宅せぬうちに家屋家財は全焼
それを見にゆくひまもなく三晩
不眠不休で傷者の救護にあたりに
した。その間山でへばつた時のこ
さを考へればこの位は何でもない
さ登山熱を吹きまくりながらやつ
てゐたので、病院の連中も山登り
やは随分頑張るもんだと云つたや
うなわけでした。

二十何年か、つて集めた山の本
山の道具も殆んど全部焼いて了つ
て残念ですが、幸ひ軀は元氣、山
登りの熱もおとろへません。そし
て家もないので病院内にそのまゝ
病室の一つを借りて、病院へ置い
てあつた爲助つたコッヘルで今も
自炊をして居ります。

(横濱醫專附屬十全病院にて)

◆ 今西 錦司

前略 西域行の雄圖空しく本月
はじめ故國へ三年ぶりに歸つてき

ました。略駢につて外蒙さかひ
をウロツイタことは、しかし無駄
ではなかつたと信じてゐます。十
九年の九月から二十年の二月迄半
年のあひだウロツイテ終戦はや
り張家口で経験しました。歸つて
からは、暇さへあれば地圖を見て
ゐます。北海道から九州までを
う一度地圖の上で眼をとほしてゐ
るのです。早く登山にフケリたい
です。近くの山から、ボチボチ足
ならしに歩かうと思つてゐます。
會報が來て嬉しいまゝに近況お知
らせ迄。

(五月廿九日)

會務報告

役員總會報告

五月五日

午後二時 於松方三郎氏方

出席者 島山、松方、中司、藤島、
兼松、木村、田邊、織内、垣内、
塚本、金山、富田、他八委任
議長 島山理事
一、任期満了セル役員改選ニ關ス
ル件(松方評議員議長ニ代ツテ
提案)

理事、幹事、監事各候補者ヲ推
舉ス(氏名會員總會決定ニ同ジ)
異議ナク可決

尙全役員中任期未了ノモノハ

幹事 垣内 政彦
同 關根 吉郎

ノ二名ナリ

一、決算及豫算案ノ件ハ二十五日
開催ノ總會準備會ニ一任

一、月例集會ノ件
月一回第二土曜日ニ會員ノ集會
ヲナスコト

(右ハ後ニ兼松幹事ノ盡力ニヨ
リ會場ハ帝國鐵道協會ト決定)

一、山岳選書ノ編纂
主トシテ「山岳」ヨリ拔萃シ四六
判六十頁程度ノ本會編山岳選書
ヲ研究社ヨリ刊行スルコトス

第一シリーズ六冊程度ヲ至急準
備ニ着手ノコト

一、評議員會ハ左ノ新評議員ヲ推
舉ニ決定

浦松 佐美太郎

島田 巽

磯野 計藏

田邊 主計

角田 吉夫

沼井 鐵太郎

額田 敏

中司 文夫

吉澤 一郎

中原 繁之助

別宮 貞俊

水野 祥太郎

栗飯 原健三

今西 錦司

後記 右十四氏ハ全部就任受諾
セリ 六月一日

總會準備會

五月二十五日 午後二時

於共同通信社會議室開催

出席者 島山、木村、松方、藤
島、塚本

一、塚本幹事原案決算及豫算案ヲ
島山理事修正シタルモノヲ決定
會員總會ニ提出ノコトス

一、山岳選書解説文執筆者
松方、藤島、田邊ノ三氏擔任

一、當分ノ内事實上ノ事務所ナ駒
場ノ塚本主事宅ニ置クコト

役員總會報告

六月一日 會員總會終了後開催

出席者 松方、藤島、三田、中司、
武田、田邊、木村、島山、浦松、
垣内、中屋、林、藤木、關根、島
田、谷口、塚本

議長 島山監事
一、會長・副會長推舉ニ關スル件
會長ニ理事 松方義三郎
副會長ニ理事 藤島敏男

同 理事 三田幸夫
ヲ推舉ス

右拍手裡ニ満場一致可決ス

以上

昭和二十一年度 通常總會

日時 六月一日 午後二時

場所 藏前工業會館
議長 副會長西堀榮三郎

書記 田邊主計、織内信彦

司會 塚本繁松

議長着席

招集狀發送數(會報掲載)
一千二百名(五月二十日會員總
數一千二百四十三名のうち現在
住所不明の會員二百三十一名に
は招集狀保留)

本日の出席者 二十四名
意見具申者 一名
委任出席者 九百八十八名
よつて定款第二十一條及第二十三
條による總會成立を宣す。たゞ今
回の招集狀は檢閲のため相當に延
滞のものある模様を遺憾とす

會務報告(松方評議員)
戦争の終末に近づくにつれ一切
の客觀的狀勢が次第に本會の事業
遂行を困難ならしめた。
昨年五月廿五日虎ノ門の本會事務
所が戦災によつて焼失し一切が灰
燼となつた。中でも未發表の木暮
會長記念文庫を失つたことは特に
遺憾である。

戦災後假事務所を島山理事宅に置
き、實際上の事務は引續き塚本主
事が自宅で取り事業復活の準備を
進めた。最近漸く第一着手として
會報を復活し既に二回發行した。
主として「山岳」の中から高評あ
るものを拔萃して「山岳選書」を
編纂し研究社より刊行させる事と
して目下鋭意準備中である。

「山岳」の復刊準備中、原稿さへ早く揃へ得れば本年中に刊行し得る模様である。

事務所の設置についても努力中であるが、それについては會員各位の援助を要望したい。尙現在目黒區駒場の塚本主事宅で事務を取扱つてゐる。

毎月第二土曜日の午後 交通協會（有樂町有樂館隣）に會員の定期集會をなすことに決定し今月より實行する。

尙新しい事業計畫については新役員就任の上協議決定したい。

會員の現状・會員は逐年増加の一途を辿りつゝあつて、昨年春は一、千三百名近くに達したが、大部分の會員は都市居住者である爲戦災者極めて多く、目下調査中であるが或は七百名前後に達するもので

はないかと思ふ。現在の所在外者と行先不明の會員とを合せれば二百四十名程あり、又百七八十名程の會員はまだはつきり様子が分つてゐないので、現在確保されてゐる會員は八百五十名程である。

尙目下入會希望者は二十名程あり今後の入會者は相當多い見込である。

物故會員は昭和十八年十一月以來三十名に達した。戦没者黒田孝雄、湯淺巖、長沼重、島速雄、黒岩徳千代、松野節夫、美木富士哉の

各氏。戦災死者飯塚篤之助、熊田喜平治、柏岡英男の各氏。其他病死せられた各氏に對し深甚の謝意を表し御冥福を祈る次第である。次いで決算報告及豫算案を上げ、塚本幹事説明す。異議なく可決（追て會報に發表）

○小集會開催御通知○

七月十四日（日）午後一時

場所 藏前工業會館（新橋驛前）

講演 ウェストン著「日本アルプス登山と探検」出版五十年を記念して

講師 浦松 佐美太郎氏
松方 三郎氏

久し振りに開かれる小集會です。舊交をあたため旁々といつても少々あたゝか過ぎる季節ではありますが、どうぞ御來會の程御待ちします

昭和廿一年六月

社団法人 日本山岳會

西堀議長は理事・幹事・監事の選任の件を上げ。五月五日の役員總會に於て推挙したる氏名を提示して賛成を求めたる所異議なく可決

新役員は當日より就任する事となつた。

理事 松方義三郎、藤島敏男、三

田幸夫、津田周二、富田健一

幹事 谷口現吉、大島陽一、今村正二、中屋健次、林和夫、塚本繁松、木藤橋一郎、三好毅一

田中榮藏

監事 島山悦成、木村鐵口

次に昭和十九年度通常總會にて可決された本會の目的に關する定款一部改訂の取止め方の件を上げ。

右は厚生省の要望により改訂せんとしたるものなれども、其後厚生省より許可なく、改訂は自然消滅の形となつたもので異議なく可決

次で山田奈良雄氏より意見具申の件を上げ

一、會費、年額一百圓也に値上げの事

二、終身會費も之に伴つて値上げの事

三、會費値上實施まで終身會費を納入して終身會員となる取扱は中止する事

四、戦争中軍國主義に反轉し、終戦後自由主義に再反轉したる節なき人達の指導する登山協會への協力は會としてはなさざる事

五、山の綜合案内書を刊行し、山日記を再刊する事 以上

右に對する決定事項

一、直ちに會費値上げを行はず、

「山岳」發行の場合はその發行助成金を會員より徴集する事

會員は右助成金を納付する義務あるものとす

二、三 終身會費の取扱を一時停止す 現在の終身會員も本年度會費及「山岳」發行助成金を納付すべき事

四、日本登山協會については慎重に研究調査の上善處の事

五、山の綜合案内書刊行の必要を認む。状況の改善をまつて着手の事。山日記は可及的速やかに再刊す。

以上を以て、議事全部終了。議長閉會を宣言す

出席者 塚本繁松、田邊主計、織内信彦、木村鐵口、藤島敏男、三田幸夫、松方義三郎、神谷恭浦松佐美太郎、小野幸、島山悦成、瀨名貞利、中司文夫、西堀榮三郎、交野武一、兼松學垣内政彦、中屋健次、林和夫、藤木九三、關根吉郎、島田巽谷口現吉、武田久吉。

意見具申者 山田奈良雄（塚本繁松記）

會員消息

吉田八郎氏 スマトラ殘留中十二年三月頃歸還の豫定

網本芳人氏 廣島原爆に生命無事

柴田福三氏 同

矢作太郎氏 現在泰國にあり

飯田輝英氏 復員

野村重次氏 貝島炭礦を去り杣木原炭礦副長として勤務

佐々木茂策氏 改組後の文藝春秋社長に就任

宮井英明氏 漢口にあつて健在

荒木正一郎氏 復員 東京急行本社に復歸

山本雄一郎氏 尙北鮮に居る模様

今西錦司氏 五月上旬歸國

松岡 實氏 協同組合實務協會經營

坂原三四郎氏 復員

濱野正男氏 復員清水組へ復歸

大野俊男氏 佛印より歸國

服部輝仁氏 復員

只松利夫氏 復員

沼井鐵太郎氏 昨年十一月朝鮮より引揚げ今回銀座に新生化學研究所相談部を設けられた由

錦織保清氏 福岡村役場に勤務中とは同村國營委託開發事務所に勤務中の誤り

村瀬 圭氏 昨春名古屋にて戦災、コレクション數千點、七千冊の山岳關係書籍を失はれたる由

會員定期集會

日時 毎月第二土曜日午後
場所 鐵道協會
(有樂町有樂館隣)

右六月より實行致しますから會員
外でも熱心な方をお誘ひ合して御
來場下さい。

次號豫告

- 高田富士 關根吉郎
- 遠山奇談拾遺 小野 幸
- 山と職業 瀨名貞利
- 藥師 岳 名川川 浩
- 其 他

會長・副會長就任

- 會長 松方義三郎
- 副會長 藤島 敏男
- 同 三田 幸夫

本誌市販に就て

山岳文化普及の消息の知れない
會員を尋ねる爲と、毎月發行の經
費補助のため本誌を書店に出しま
した。會員諸兄の御支援を切望致
します。一三三號から取揃へ定價
通り何十部でもお頒ちしますから
何卒取まとも御注文下さい。

通信連絡所移轉

通信連絡所は左記に移轉しまし
た。本會に對する一切の通信は左
記にお願ひ致します。

東京都目黒區駒場一高前園園住宅
塚本万 日本山岳會通信連絡所

編輯後記

復刊第三回目にしつこの内容を
盛り得た事を編者として深く感謝
したいと存じます。元老小島鳥水
氏の熱烈なる本會再生への激動、
新人林和夫氏の熱意の漲る抱負、
武田博士の多年の研究の結晶の發
表など、本會ならではと感激せず
に居られません。まことに日本山
岳會亡びず、日本亡びずの感をさ
へ深くするのであります。

次號の豫告さへ出来る程になり
ましたが、編輯者はこれで大丈夫
と樂觀してゐるのではありませ
ん、復刊五・六號あたりの危機
到來も豫想せられますので、何卒
各位の絶えざる御支援を仰ぎたく
懇願致します。原稿はいくらあつ
ても餘るなどといふ事はないと思
ひます。特に研究と紀行の稿を切
望致します。圖書紹介の稿も入手
に困難を感じて居りますので、再
版を望みたいやうな圖書をお持ちの
方は新舊に係らず何卒御紹介下さ
い。

ものには勢といふものがありま
すが、本誌は今正に勢に乗つたと
言へませう。この勢を挫折させな
いやうに守り育てたいと存じます
本誌も亦藤島玄氏のお世話になり
ました。厚くお禮申し上げます。

★飯豊連峰特輯號★

二王子嶽より飯豊本山・大日
嶽を繞りて・胎内川岩魚日記
飯豊連峰文獻抄外二十餘項目
A五版九百五十六字詰百餘頁
頒價 送料共 金參圓
新潟市祝町四八八八
藤島 玄

ルツク・ザツク

前號に申し上げました通り、布地
お持の方にルツクのお仕立を致し
ます。左記御諒承の上何卒御用命
の程お願い致します。
一、御所持の布地見本を御送附、
其際布地の寸法とルツクの大き
さを御通知の事
一、それ等を拜見の上御注文承度
長野縣下伊那郡新木村
阿島上町

片桐盛之助

昭和二十一年六月二十日發行
頒價金二圓・送料十錢
東京都目黒區駒場八六五
一高前園園住宅三九號
編輯者 塚本 繁松
發行所 日本山岳會
發行所 日本山岳會
會員番號二四二六號
新潟市西堀通三番町
印刷 本 田 芳 平
新潟市西堀通三番町
印刷所 昭和時報社
電話七二四番

東京都神田區淡路町二ノ九
配給元 日本出版配給株式會社

完成！ 發賣中の山岳圖書

- ★山と溪谷 一部三圖(送一〇〇)
- ★冬の志賀高原 給葉書版 寫真集 八圖(送三〇)
- ★アレンバイン 一九四六―七年度 十二圖(送三〇)
- ★箱根・天城(地圖帳) 中三圖(送二〇)
- ★武州御嶽(五萬分) 山と溪谷社編・精密二色刷 四圖(送二〇)

印刷進行中の山岳圖書

- ★上越國境 塚本 繁松 著 二十圖(送三〇)
- ★奥武藏(五萬分) 山と溪谷社編・精密二色刷 四圖(送二〇)

組版進行中の山岳圖書

- ★溪谷の思想 冠松 次郎 著 八圖(送三〇)
- ★鳥の山旅 河田 慎堂 著 十五圖(送六〇)
- ★紀行と隨想 三田 幸夫 著 八圖(送三〇)
- ★山岳版畫集 三田 幸夫 著 八圖(送三〇)
- ★北米氷河山岳跋涉記 三田 幸夫 著 八圖(送三〇)
- ★氷雪圖の記録 加納 一郎 著 八圖(送三〇)
- ★富士と周圍の山(登山地圖帳) 冠松 次郎 著 三圖(送二〇)
- ★淺間山と神津牧場(〃) 中村 謙著 三圖(送二〇)
- ★美ヶ原と霧ヶ峰(〃) 中村 謙著 三圖(送二〇)
- ★其他組版・執筆進行中のもの多數

東京都京橋區
銀座八丁目ビル
山と溪谷社
振替東京六〇二四九番